

分離等位接続の発達と変遷

山村 崇斗

指定部編入原理

Van Gelderen (2008)は、「句は付加詞としてよりも指定部として構造に導入される方が望ましい」という原理 (Specifier Incorporation (SIP)) が言語変化・文法変化で機能していると論じている。また、van Gelderen (2019)は、Chomsky (2013)以降のラベル付け計算法 (Labelling Algorithm) の理念に則り、(1)を「対併合よりも集合併合の方が望ましい」と述べている。本稿では、分離等位接続の史的変遷の観察から等位接続構造の構造変化を提案し、その変化が(1)を例示することを論じる。

(1) Specifier Incorporation (SIP)

When possible, be a specifier rather than an adjunct.

(van Gelderen (2008: 250))

分離等位接続主語

史的英語のテキストでは(2)のような分離等位接続主語 (Split Coordinated Subject)の事例がみられる。等位構造には(3)のような内部構造が仮定されてきており、等位接続詞(Co)と第二等位項(C2)からなる構成素(α)が中間投射であるのか、あるいは最大投射であるのかが議論されてきたが、本稿では(1)の原理に則り、対併合によって導入されていた α が、構造変化によって集合併合によって導入されるようになったと論じる。

(2) *ond æfter ðam Hengest feng to rice ond Æsc his sunu*

(ASC, 455)

‘and after that, Hengist and Oisc his son succeeded the kingdom’

(Reszkiewicz (1966: 316))

(3) [_γ C1 [_α Co C2]]

分離等位接続への移動分析

(2)は文頭に大きな要素を置かないための方略と考えられている (cf. Reszkiewicz (1966), Mitchell (1985))。Taylor and Pintzuk (2017)はコーパス調査から、史的英語の分離等位接続には(4)に示す2種類の派生方法があったと主張する。(4a)ではC1の左方移動が、(4b)では α の右方移動が適用されている。これらに加え、(5)の現代英語のBare Argument Ellipsisのように削除によって分析可能な事例も存在すると想定されている。

(4) a. *Ac [se Aaron]_i sceolde t_i and þa ealdan bisceopas geoffrian Gode ...*

‘lit. but that Aaron should and those old bishops offer to-God’

(YCOE: colwstan1,+ALet_2_[Wulfstan_1]124.178) / Taylor and Pintzuk (2017: 168)

b. *þæt hi t_i sceoldon habban. [_& heora ofspring mid him]_i, þa fægeran wununge*

‘lit. that they should have and their offspring with them the fair dwelling’

(YCOE: colsigewZ,+ALet_4_[SigewardZ]:108.46) / Taylor and Pintzuk (2017: 168)

(5) *Cynthia’s coming and David and their kids are coming.*

(cf. Taylor and Pintzuk (2017: 161))

このような移動には、まず α は最大投射である必要がある (cf. Chomsky (1995))。また、C1の左方移動は等位接続構造制約 (Coordinated Structure Constraint)の違反になるため、理論的説明が必要である(cf. Ross (1967))。

史的英語の等位構造の史的变化

Zhang (2010)は、(3)の階層構造について、現代英語のCoはC1の範疇特性を継承し、 γ はC1と同じ範疇になると論じる。これは(6)のように、等位構造が選択関係の点でC1に依存する事実に基づいている。(7)の非文法性は、C1の分離による γ の範疇の決定不全と説明される。一方、中国語のgenは範疇決定の点でC1に依存しない独自の範疇特性を備える等位接続詞であるため、genの等位構造からC1を抜き出し可能であると説明し、(8b)のような前置詞用法genが(8a)の等位構造から派生されていると論じている。この観察を援用し、本稿では英語の等位接続詞の史的变化として(9)を提案する。

- (6) a. You can depend on [DP [DP my assistance] [D and [CP that he will be on time]]].
 b. *You can depend on [CP that he will be on time].
 c. *You can depend on [CP [CP that he will be on time] [C' and [DP my assistance]]]. (cf. Zhang (2010: 50))
- (7) a. *John_i seems to be [_i and Mary] in the room.
 b. *Who_i did John kiss [_i and a girl]? (cf. Zhang (2010: 79))
- (8) a. [Akiu gen Baoyu] zai Riben jian-le mian.
 'lit. [Akiu and Baoyu] at Japan meet-PRF face'
 b. Akiu_i zai Riben [_i gen Baoyu] jian-le mian.
 'lit. Akiu at Japan [and Baoyu] meet-PRF face' (cf. Zhang (2010: 112ff.))
- (9) a. 古英語の等位接続詞は独自の範疇特性を備えており、C1に依存しない構造 ([DP₁ DP₁ [CoP and DP₂]]) を成し、分離等位構造がC1の左方移動により派生可能であった。
 b. 古英語以降、現代英語に至るまでに等位接続詞の範疇特性が失われていったため、C1に依存する構造 ([DP₀ DP₁ [D₀' and DP₂]]) になり、C1の左方移動が不可能になった。

(9a)の段階では、CoPがDP₁に付加している。DP内からのPPの外置は、(10)-(11)の通り現代英語だけでなく古英語でも観察されるため、それらと並行的に扱える可能性がある。

- (10) a. He sold a painting by Turner at Sotheby's.
 b. He sold a painting at Sotheby's by Turner. (Göbbel (2020: 1))
- (11) *þæt sum ungesælig man hine sylfne ahenge, of þære hiwraedene*
 'lit. that some unhappy man him self hung of that household' (coalive,+ALS [Martin]:244.6120)

(9a)の構造からDP₁のみが規定の主語位置へと左方移動すると考えれば、(12)のように分離等位接続主語では動詞が単数屈折する事実は、CoPのDP₁への付加構造のため、Tのもつu-φ素性はAgree関係の目標(Goal)としてDP₁のみを検出していることを示すものとして考えることができる。

- (12) *ond æfter ðam Hengest feng to rice ond Æsc his sunu* (ASC, 455)
 'and after that, Hengist and Oisc his son succeeded the kingdom' (Reszkiewicz (1966: 316))

等位接続詞が独自の範疇素性を失い、(9b)の構造になるとC1の左方移動もC2の右方移動も不可能になる。(5)のような事例は見かけ上の分離等位構造であり、本質的には省略構文として扱われることになる。

結び

英語史における分離等位構造の衰退は、等位接続詞の範疇特性の変化とそれに伴う等位構造全体の構造変化に起因する可能性を論じた。CoとC2が形成する構成素αとC1との構造的関係が対併合から集合併合へと変化したと考え、これがvan Gelderen (2019)の提案するSIPを例示すると論じた。Taylor and Pintzuk (2017)の分離等位構造の調査によれば等位接続詞の変化は起きたのは初期近代英語以降である。しかし、筆者によるコーパス調査では、中英語の分離等位接続主語283例中、CoPが定形動詞に後続する例が272例あり、その中でCoPになにも後続しないせず、省略構文として分析可能な事例が242例確認されており、Taylor and Pintzuk (2017)が報告しているような緩やかな変化を見直す必要性もありうる。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 20K00564 の助成を受けたものである。

主要参考文献

Gelderen, Elly van (2019) "Cyclical Change and Problems of Projection," *Cycles in Language Change*, ed. by Miriam Bouzouita, Anne Breitbarth, Lieven Danckaert, and Elisabeth Witzgenhausen, 13-32, OUP, New York. / Taylor, Ann and Susan Pintzuk (2017) "Split Coordination in Early English," *Word Order Change in Acquisition and Language Contact*, ed. by Bettelou Los and Pieter de Haan, 155-183, John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia. / Zhang, Niina Ning, (2010) *Coordination in Syntax*, CUP, Cambridge.